

「学び問い続ける力」を背景とした 個の探求と集団における学び合い②

提案者 大根田友萌

キーワード 深い学び 「学び問い続ける」ための題材テーマ 境界 ボックスアート
活動への振り返り

1. 美術科における「深い学び」

(1) 本校の美術科の目標

本校の美術科の目標は、美術の活動を通して、自身と対峙し理解を深め、自己表現の術を探るとともに、社会に必要な自己と他との関係性について探ること。また、日々の中で巡り合う物事において、豊かな心情を持って捉え、生きることへの喜びに繋がられる力を養うことである。美術に触れる活動は、個々の感覚に基づき、「楽しい」「美しい」「面白い」等の感覚を引き出し、働きかける学習体験の場と捉えている。また、「自己」と「他」との存在について、制作の手応えや仲間との語らいの中で抱く意思の交換や、その中で積み重ねられた経験、実感が新たなみかたや出会いを紡ぎだすと考える。その営みの中で、探究し続けられるような継続的な問いを生徒に託すとともに、生徒自身にとっての「アートとは」について働きかけ、自己の価値観を培えるよう働きかけたいと考えている。

(2) 美術科の「深い学び」と教科の本質

上記にある本校の美術科の目標は、「深い学び」としての観点を込めたものと捉えている。本校の美術科における「深い学び」とは、色やかたちを中心とした表現活動や鑑賞活動を通して、新しい物事と出会ったりみかたを変えたり関連付けたりしながら思考を巡らせること。また、そこから内にある思いや願い、考えを自らの生きる姿に波及したり、自己の価値観を築いたりすること、と捉えている。色やかたちなどについて、みたりつくったり語らったりすることに興味関心を抱き、もっと関わりたいと生徒自身が思う中で、美術が美術で終わらない、これから生きていく上での糧や資質を培えるような学びに繋がっていくこと。そして、この「深い学び」こそが、中学校における美術教育の本質と捉えている。

2. 「美術科の研究主題」設定の理由

(1) 「学び問い続ける力」を背景とした個の探求と集団における学び合い

ここにいう「学び問い続ける力」とは、子どもを基点として、生涯にわたり、学びと問いの営みの中で、主体的に関わり続けようとする力のことを示す。自己に問い、他者に問い、そして自己にまた問う営みを繰り返しながら、学びの深化と拡張を繰り返す力である。本質的な学びとは、一問一答のような完結的習得には終わらない、無限の広がりを持つものであると考える。学びは問いを生み、問いは学びを生む。経験を増やしながらか常に新たな見方に出会い、学び問い続けることが個々に育まれる生きる力を紡ぎ続けると考える。また、個と社会全体との関係性の中で、各々の芯と柔軟性をもった社会を築ける資質を培う力である。そして、「学び問い続ける力」が上記に示した「深い学び」への動向を促す力となると捉えている。中学校での教育において、短期的な視野での知識・技能の習得に終わらず、長期的な視野を持ち、子ども自身が生涯に渡って拡張し、深化し、変革し合いながら、「学び問い続ける力」が培えるような働きかけを探っている。個の探求と集団における学び合いについて、「深い学び」は生徒ひとり一人の個において動向するものであるが、自分以外の他者の存在は不可欠である。個が、授業

者や仲間などの他者と共に新しい物事と出会ったりみかたを変えたりしながら思考を巡らせられるような学び合いの場を設けていきたい。

(2) 「深い学び」を促す「学び問い続ける力」への働きかけや取り組み

学習意欲を高め「学び問い続ける力」に働きかけることが「深い学び」を促すと捉え、そこには生徒の内に活動の動機を持ち、能動的、主体的に学習に関わる必要があると考える。これを踏まえ、以下のような観点をもち、学習活動を図っている。

①カリキュラムや題材の提供

- ・身近なものへの視点や新しいものと出会ったりみかたを変えたりしながら、生徒が興味関心を持つ内容
- ・経験や実感の中で、自身の価値を構築するための手がかりとなる視点
- ・鑑賞活動と表現活動のつながりへの意識

②学び合いを活かした学習展開

- ・生徒自らが発したことについて、他者からのフィードバックをもらいながら、自己存在を確かめられる過程
- ・自己と他者との関係性により、コミュニケーションを図りながら物事のみかたについて拡張や深化を起こした学び合いのある学習活動
- ・個と集団に対する、知識や活動についての働きかけやサポート

3. 授業実践

今年度においては、題材のテーマに焦点を当て、授業提供を模索していった。「学び問い続ける」には、変動性と普遍性の両者を兼ね備えるようなテーマ性が題材に込められること、また、美術での活動が生徒にとっての「自分事」となることが、長期的に記憶を残せる手立てになるのではと考えた。美術の活動の動機を、生徒の内に置けるようなみかたの切口を探っていった。

1. 題材名 : 「14歳の私の境界 ～境界のボックスアート～」
2. 対象学年 : 2学年(男子20名 女子20名 計40名)×4学級
3. 活動内容 : 身の回りに起きている出来事やこれまでの自身の経験などから感じた「境界」を探り、その考えや視点をボックスアートにして制作する。
4. 題材目標 : 身の回りにある「境界」をテーマとしたボックスアートを制作し、自分の考えや視点を表現する手段を探る。また「境界」への視野を広げるとともに、表現方法の多様性に触れる。
 - ・身の回りに起きている出来事やこれまでの経験などから「境界」について考え、境界を生み出すものや人の意識との関係について探る。
 - ・ボックスアートについて、「箱の活かし方」や「色彩、線、かたち」、「素材(画材)」などを意識しながら、そのテーマを効果的に表現するための構想を練り、表現方法を工夫する。
 - ・友だちの作品を鑑賞し、「境界」への視野を広げるとともに、表現方法の多様性に触れる。

5. 題材観

(1) 生徒の実態

本題材を実施するのは中学校2年生である。この学年は14歳となる年であり、立志として社会に対峙する節目に位置する時期である。また、生徒の実態として「大人」と「子ども」の狭間に置かれるとともに、自分のアイデンティティーと社会との間で思い揺らぐ成長過程におかれている子どもが多く見受けられる。自身が抱いている感覚への価値を立ち止まれる機会を設けていきたい。また、そのような時期だからこそ、社会と自身との接点として、多くの人に精通するような感覚を敏感に働かせられるのではないだろうか。アートとの関わりとして、社会に対する自己主張としての発声の場に活かしていきたい。